

なぜ、結婚は女性にのみ条件を強いるのか？無くならないジェンダーの不平等 ティリニ・ウィジェットウンガ（スリランカ）

「男子が生まれると、両親は喜びいっぱい有頂天になる」。昔から多くのアジアの国々には、よくこうしたことが言われます。男子が生まれるということは宝くじに当たったようなものであり、一方、女子が生まれるということは「隣家の庭の植物に水をやる」ようなものなのです。つまり、水をやり、日光を浴びせ、肥料をやるけれども、収穫の時期になると、その隣家の人が収穫してしまう可能性が高いということを表わしています。これはまるで、自分の努力や犠牲が見知らぬ誰かにさらわれるようなものなのです。こうした状況は、女性の出産がさまざまな方法でコントロールされている中国やインドなどのアジアの国々において、より顕著です。

スリランカの場合、国民、特に女性の教育レベルが高いため、こうした状況はあまり当てはまりません。しかしながら、地方においては未だに「娘がいることはその家庭にとって負担になる」と考える家庭もあり、これにはさまざまな要因が絡んでいるように思います。「家族の大黒柱になるのは男子だけである」と考える人びともいます。男子は、将来、その家庭を支える存在になると思われ、だからこそ「男子はしっかり育ててきっちり教育を受けさせるべきだ」と考えるのです。また、娘の場合、どれほど愛情をかけて世話をしたとしても、その娘がどれほど美しく心の優しい子であったとしても、結局のところ「その娘は自分のものにはならない」という考え方も昔からあります。もし娘があなたのそばで、あなたを幸せにし、あなたの面倒を見てくれたとしても、最終的には、その娘はあなたのもとを去って、別の家族のところに行ってしまう、そこで、娘、妹、そして母親という、新たな自分の義務を果たし続けるのです。さらに何にもまして、娘が結婚する際の持参金の確保という重荷を背負わなければいけないと両親は考えるのです。

特に持参金に関する問題により、結婚に際して女性が苦しむケースは数多くあります。スリランカの社会では、持参金は年頃の女性の人生において大きな役割を果たします。夫に持参金を渡すということがルールになっているわけではありません。しかし、持参金は伝統なのです。両親が持参金によって娘を支援することができる場合、結婚に際し、往々にしてその娘は義理の家族にきちんと受け入れられ、十分な敬意を払われ



伝統的なスリランカのウェディング・カップル

ます。そのため、娘の持参金としてお金や土地を確保しようと両親が奮闘することは習慣になっているのです。

スリランカの伝統的な社会では、結婚に関するもう1つの社会的な規範があります。それは、「結婚に際して女性の処女性を確認する」というものです。これはアジアの伝統的な地方の家庭では未だに広く見られます。これはまさにジェンダー差別です。女性のみが男性の手に触れられることなく、処女性を維持するものとされているのです。いずれにせよ、もし女性が結婚するまで処女性を守っていない場合、結婚後、その女性は永遠に苦しみ続けるのです。確かに、どんな場合も安全な性交渉は素晴らしいことです。若者は性行為に関するしるべき教育を受けるべきです。しかしながら、女性の処女性を確認することは、どんなに我慢したとしても、社会規範として到底受け入れられるものではありません。可能な限りのあらゆる面で、女性は男性と同様に強く能力があると証明されているにも関わらず、こうした種類の誤った考えにより、成功の階段を登ろうにも、女性は非常に低い所に留められたままなのです。

上記で説明した差別の他にも、女性にネガティブな影響をもたらす差別的な習慣がまだあります。結婚した女性に子どもができない場合、社会で低く見られることが多く、「価値の無い妻」として非難されるのです。かつては、こうした女性は夫や夫の家族から無視され、社会からバカにされ苦しめられ、さらには、自分たちの世代を次につなげることができないのは自分のせいだと考え、精神に異常をきたしていました。インドのような国では、こうした状況の場合、夫は別の女性と結婚することも可能で、夫はその新しい妻と子どもと幸せな家庭生活を同じ家で楽しみながらも、前の「妻」には途方もない心痛や苦しみが与えられ無視されていました。こうした考えは、多くの宗教や古い考えが根底にある状況においては、さらには、一夫多妻制や一妻多夫制が行われているところでは、いまだに見られます。

今日私たちが暮らす世界では技術が発達し、医療科学により私たちの健康や肉体に関する問題のほとんどは解決することができます。こうしたことを踏まえると、ほとんどのケースにおいて、上記で説明したように、女性だけが責められるべきでないことは証明されています。出産に関しては、男性も同様に果たすべき役割があるのです。にもかかわらず、今日もなお、大多数の人びとが誤解したままであり、女性のみが後ろ指をさされるのです。

結婚した後も、初めての子どもの場合、かつてのスリランカでは、ややこしいことになっていました。しかしながら、現在では、こうした状況はかなり変わりました。女性の教育レベルが上がり、持参金の問題も社会的に少なくなってきました。人びとの現在の考えは、結婚する2人が教育を受けており、しかるべき収入があるのであれば、その二人は問題なく落ち着いた幸せな生活を送れるだろう、というものです。婚前交渉についても、都市部の若い世代の間では一般的になりました。ただし、私たちの文化的規範もあり、婚前交渉が多くの人から受け入れられているわけではありません。しかしながら、結婚に際して女性の処女性を確認することは、教育を受けた人びとの間では、もはや行われていません。教育のおかげで、現在のスリランカの社会は非常に良い方向に変化したのです。スリランカの

女性の地位は、ここ 10 年、歴代のスリランカ政府が一方の性に限定した介入を実施してきたために、多くの素晴らしい変化が起きました。その結果、スリランカの女性は、他のアジアの女性と比べ、地位の平等を享受するという幸運を手にかけています。しかしながら、特に結婚に関する問題においては、根深い文化的規範が女性に対する差別的な行動につながる事例も見られます。